ヤスクニ通信　No.259　2021 年 10 月 15 日
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・星出卓也（Tel/Fax042-458-0251）
事務局　西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP　http://yasukuninotsudoi.christian.jp/
例会　毎月第3金曜　7:00～9:00pm（休日の時第 4 金）会場　NCC フリースペース（新宿区西早稲田 2-3-18 日本キリスト教会館 24 号）

ヤスクニ・レポ　259

首相・閣僚の靖国参拝は外交問題？

星出　卓也（日本長老教会 西武柳沢キリスト教会牧師）

１．憲法違反は国内問題

最近、メディアは自民党総裁選報道に躍起であった。候補者全員揃って、既定路線の継承なのに、総選挙において他の選択肢がまるで存在しないかのように報道をそこに集中していた。手品師が、右手のオーバーアクションで人々の目をそこに向け、左手に関心が向かないように仕向けるテクニックのようであった。

同じく自民党総裁選に関して意図を感じたのが、靖国神社参拝に対する自民党総裁候補者の考えがクローズアップされたこと。高市早苗氏が、首相になっても靖国神社参拝をすると公約したのは、政教分離原則違反を堂々と公約したようなもの。憲法違反を公約しても問題とならず、むしろ人気を得るようになるまで日本社会は劣化してしまった。しかもこの問題は、「外交問題」として取り上げられ、中国、韓国の内政干渉問題、と宣伝された。中国系メディアの批判に対して、高市氏は 9 月 12 日フジテレビ「日曜報道ザ・プライム」で「私はこれを外交問題でなくすための活動を続けたいですね。」と語った。

もちろん首相の靖国参拝は、侵略を受けたアジア各国から非難され外交問題になる。しかし外交問題以前に、憲法違反は国内問題である。国のために戦死することを最高善とする価値観を一律に全市民に課し、徹底教化した靖国神社の果たした役割。この歴史の反省から、政教分離原則は定められた。

靖国神社は、戦前はもちろんそうだが、今でも皇軍側の戦死者のみを祀っている。皇軍として天皇のために戦死した死を褒め称える一方、殺されたアジア諸国の被害者の死には一切目を向けさせない。皇軍に踏みつけられ殺された死者たちは目に入らないようにされ、人々は天皇のためにいのちをささげた名誉の死、という自国中心の思想に市民を誘導し、他国の痛みを見ないように、一方の事実は隠し通された。

報道は、大本営発表だけを宣伝する政府の広告塔となり、もう一方の隠された事実を伝える者は「国賊」「スパイ」として徹底弾圧された。

しかもこれは戦前・戦中の過去の問題に留まらず、今でも靖国神社は皇軍側の死を褒め称える一方、皇軍がもたらした残虐な殺戮は語らず、触れることはない。事は靖国神社だけの問題だけではなく、歴史教育においても「強制連行」「南京大虐殺」「戦時性奴隷制度」いわゆる「従軍慰安婦」の歴史を語ることは「中立」ではないとし、「反日教育」とされ、削除の対象となり、このようにして自国中心の思想は現代においても再生産され続ける。

翻って世界を見回すと、ドイツにおける戦後の歴史教育は極めて重要で、徹底して加害の記憶の継承を行った。しかし、特に勝戦国においては、靖国同様に、自国の兵士の戦死は「名誉の死」として褒め称えても、自国の軍隊が殺した戦死者については語ろうとしない。高市早苗氏が 9 月 12 日の「日曜報道ザ・プライム」にて、「お互いの国のために命を捧げた方に敬意を表し合うことを当たり前にしたい」と語った通りである。多くの国が自国のための戦死を褒め称えても、自国が踏みつけ殺戮した死者たちを見ようともしない。そうして今日も、国のために死ぬことは教化され、当然とされている。高市早苗氏が語ったことは、この自国中心の世界標準を日本も、各国手を取り合ってさらに推進しなければ、と言う趣旨であろう。その世界標準は、戦後ドイツのような「加害の歴史に目を向け、記憶に刻む」（ヴァイツゼッカー大統領 1985 年 5 月 8 日演説『荒野の 40 年』）という世界標準ではなく、自国兵士の死のみを称えるヤスクニ的な世界標準である。日本社会は特にこの負の歴史を未だに総括できていない。これは日本社会が今尚抱えている歴史を総括できない国内問題である。ここから意図的に目を逸らすために、靖国問題は「外交問題」と論点を集約させる。

報道は冷静にここを突っ込み、提示された論点の嘘を指摘するのが使命なはずなのに、一緒になって「外交問題」と書き立て右手のオーバーアクションに加担する。この問題を理解する心ある記者さんは多いが、その言葉が前面に記事にでるのは難しい。

２．そもそも「反発」ではなく「抗議」

「中国、韓国からの反発」と言う言葉には、幾つもの論点隠しの嘘が見られる。

まずは抗議するのは中国、韓国政府だけではない。オランダやアメリカといった西側諸国からも抗議や懸念が表明されている。2013 年の安倍晋三（当時）首相が靖国参拝に対して、アメリカ政府は「disappointed・失望した」との声明を出した。靖国神社参拝は、民主主義と人権尊重というと共通の価値観と歴史認識に対する重大な侵害と見なされ、非難の対象になっている。

またそれらは「反発」ではなく「抗議」である。「反発」と言う言葉には、「非合理で感情的な応答」であるという含みがある。それは「不当な内政干渉」で事柄を片付けようとするための意図が込められた言葉のように思われる。各国が首相・閣僚の靖国参拝に対して語るのは「反発」ではなくて「抗議」である。踏みつけられ、虐殺された侵略による死者たちを、あたかもないもののように歴史を修正する思惑に対して、踏みつけられた死者たちの尊厳をかけた抗議である。もちろん痛みや悲しみがともなった感情をゆさぶられるものであり、感情が伴うものであるが、それは不合理な言いがかりのニュアンスを含む「反発」と語る言葉は、最初から相手がなぜ「抗議」をするのか、耳を傾けようとしない独善的な報道の態度であることを思う。

また、抗議の声は国内からも多く存在する。ＮＣＣ靖国神社問題委員会や政教分離の会、キリスト教各教派からの抗議に加えて、今年は 7 月 29 日に「公益財団法人全日本仏教会」から「首相及び閣僚の靖国神社公式参拝に関する見解並びに要請」が首相宛てに出された。2013 年の安倍首相の靖国神社参拝には日本弁護士会会長名で抗議文が出されている（2013 年 12 月 15 日）。「国内外からの抗議」と報道するのが客観的な事実ではないだろうか。

司法における判断も、首相の靖国神社参拝を政教分離原則に照らしても合憲であるとした判決は一つもない。原告敗訴は、憲法判断を司法が避けたことによるものであり、むしろ 1991 年 1 月仙台高裁判決、1992 年 2 月福岡高裁判決、1992 年 3 月大阪高裁判決、2005 年 9 月大阪高裁判決では「違憲」に踏み込んだ判決が数多く存在している。

秋季例大祭に向けて多くの教派、団体が国内から要請を続け、なぜアジア各国が非難するのかを考えよと、抗議をしている。無視されても抗議して、全く総括されていない「戦後」を問い続けている。

２０２１年９月１７日例会奨励「天の神殿から出て」
ヨハネの黙示録 14 章 17 節　星出卓也牧師（日本長老教会西武柳沢キリスト教会）

17 節に登場する御使いは、14 節のキリストと同様に、「鎌」を持っていますが、全く違う役割を果たします。14 節の鎌は地の穀物を刈り取るための鎌で、収穫の刈り取りです。しかし今回はで「神の憤りの大きな踏み場に投げ入れた」と 19 節に続く通り、神の憤りの対象です。この時に送られる御使いは、15 節にてキリストに最後の審判の時を知らせる御使いと同様に、天の神殿から出てきます。つまり神が臨在しておられる聖所。会見の天幕において、大祭司が贖いの血を携えて年に一度だけ入ることができる、贖いの血が無ければ決して入ることができない場所。贖いの血なしに触れる者は、必ず神の聖さによって滅ぼされる神の御前です。この聖所に近づく者は必ずや滅ぼされたように、この御使いが送られる目的は、完全なる滅び、神の有罪の裁きのため。極刑実行のための派遣です。

この 17 節から始まる段落は、非常に恐ろしい段落です。これを聞く者は、皆、髪の毛が逆立ち、恐怖で戦く、そのような段落です。そこにおいてはもはや恵みは見られずに、神の憤りだけがある。

黙示録 13 章において獣を礼拝する者は全て獣の刻印を押された者たちで、子羊のいのちの書に名が記されている者以外は全て、この獣を拝み、獣の刻印を押されます。地において獣の刻印を持たない者は命を落とし、売ることも買うことも許されないほどの、普段の生活にも困窮する状況に追いやられました。しかし、このキリストの贖いを受け取った民だけが、17 節以降の恐ろしい神の裁きを逃れるのです。

私たちはこの 17 節以降で語られる神の恐ろしい審判を直視して、震え戦かなければなりません。そしてこの恐ろしい審判から唯一の逃れる道であるイエス・キリストの救いを、受け取らなければなりません。逃れる道、この滅びが過ぎ越すのは、この一つの道しかありません。生活の術を絶たれ、地上のいのちを奪われてもなお、主のみへの礼拝に留まった聖徒たちは、まことに恐れるべきものを知っていたのです。